

川村学園の建学の精神と教育思想

北村 浩一郎*

The Original Spirit of Kawamura Gakuen and its Educational Thought

Kouichirou KITAMURA

要 旨

川村学園が「感謝の心」「女性の自覚」を建学の精神としていることはよく知られている。ここでは、まずその精神の思想的な背景として、我が国古来の随神の道、大正デモクラシーの教育思想、儒教の教えなどを取り上げ、それらと建学の精神との関連を検討する。そして、創立者が最終的に到達した「ひとり」の境地の立場から、その建学の精神を明らかにする。その上で、創立者が目指す「教育」とは何かを示し、その「教育」の今日的な意義を考察する。

キーワード：感謝の心、女性の自覚、社会への奉仕、随神の道、「ひとり」の境地

はじめに

今日の我が国では、学校の自己点検・評価や第三者による認証評価が、法令によって義務付けられたこともあり、広く行われている。そして、その際、まず第1に問題になるのが、各学校の建学の理念である。特に、私学ではどのような理念の下にどのような特色のある教育をしているかが重要で、それが明確でなければ、その学校の存在理由がないといっても過言ではないであろう。

本論は、そのような視点から、川村学園の建学の精神を明らかにし、今日におけるその意義を検討する一つの私的な試みである。

しかも、その取り上げ方は、まず「川村女学院」の開設の経緯を示し、その時の建学の精神

*元教授 哲学・倫理学・生涯学習学

とその背景にある思想との関連を示しながら、建学の精神の真義について論及する。その上で、創立者が最終的に到達した「ひとり」の境地の立場から建学の精神を明確にし、今日におけるその意義について考察する。

1. 「川村女学院」の創立について

川村学園の建学の精神の元になっているのは、言うまでもなく、「川村女学院」の建学の精神である。したがって、ここではまず、その「川村女学院」創立の経緯とその建学の精神について検討してみたい。

「川村女学院」創立の直接のきっかけとなったのは、よく知られているように、大正12(1923)年の関東大震災である。関東大地震で引き起こされた大惨状を目のあたりにして、創立者は、「本当に真剣にならなければ、帝都の復興はおろか、国運の発展は到底期し難いと、心から思い」¹、そして「これは男子だけがしっかりしたのでは駄目である。女性がしっかりと女性の本来の使命に目醒めて雄雄しく動き出すことが、最も大切なことであり、最も根本的なことである」²と痛感したのである。そして、創立者は、首都東京の教育機関の大部分が灰燼の中に殆どその命脈を絶たれようとして居るという認識の下に、「帝都教育界の此の惨状は、私をして自分自身の境遇について顧慮する余裕を失はしめるに至りまして、女子教育のために何ものをも顧みずに邁進せんと決心させた」³と述べている。つまり、創立者は、関東大震災から復興するためには、ただ男性がしっかりしただけでは駄目で、女性はその本来の使命に目醒め行動しなければならないと考え、ただちに女子教育に取り組む決意をしたのである。

このように「川村女学院」創立の直接的なきっかけは、創立者が関東大震災の惨状を目前にして、自覚ある女性を育成するために女子教育に邁進する決意をしたことにある。実際、彼女は、大震災当時「『女性の自覚』という事に、前途の光明を見出して、周囲を眺めた時に、平生からの考—教育界に尽くしたいという考—を是非とも実現しなければならないと深く決意した」⁴のである。この決意は、早くも翌大正13年4月には「川村女学院」の開設という形で実現される。そして、その建学の精神は、まず大正デモクラシーを背景とした「女性の自覚」ということであった。さらに昭和2年になると後述する「感謝の歌」が朝礼や諸行事で歌われるようになり、ここに「川村女学院」の教育の2本柱である「女性の自覚」と「感謝の心」⁵が、建学の精神として確立するのである。

2. 「川村女学院」創立の思想的背景について

「川村女学院」の建学の精神を真に理解する手立てとして、先ずその思想的な背景について検討してみたい。

創立者は、女子教育のための学校を設立するに当たって、当時すでに多くみられたキリスト教系の学校でもなく、また仏教系の学校でもない日本古来の神道精神に基づいた学校の設置を考えていたようである。大正7年から川村家と親交を結び創立者の相談にも乗っていた黒澤隆朝(1895～1987)⁶によると、創立者は、「世間には仏教や、キリスト教のミッションスクールが多いが、日本の神髓の道を具現する、神道精神にもとづいた教育をしたいとおっしゃって、私にも、助言を求められました。神道精神については寛博士などのご意見なども、よくお聞きになっていた⁷」ということである。

ここにある寛博士とは、当時東京帝国大学教授で行政法、憲法学、法理学を講じていた寛克彦博士(1872～1961)のことであり、「川村女学院」開設時には評議員となっている。彼は、「日本における神道研究の最高権威⁸」とされ、創立者の夫君川村竹治と東京帝国大学法科の同期生で親友でもあったということである。

寛の基本的な学問上の立場は、「宗教は法の基本、学の根本⁹」ということであり、彼は、明治31年文部省の命により行政法の研究のためベルリン大学に留学するとともにキリスト教の研究に打ち込み¹⁰、その成果として『西洋哲理』(大正2年)を成し、また、それ以前に、法理学を担当するようになって仏教の研究に取り組み、『仏教哲理』(明治44年)を公にし、さらに大正元年には『古神道大義』を公刊している。そして、寛が結局のところ行き着いたのは古神道国教論であった¹¹とされている。

そして、寛によると、古神道とは随神の道¹²である。「かなながら(随神・惟神)¹³の道」とは、一般に「神代から伝わってきて、神慮のまま、人為を加えぬ日本固有の道¹⁴」という意味であるが、本居宣長は、それを『古事記』に出てくる神々の事跡によって、おのずから明らかになる道として、儒教の聖人の道とも仏教の悟りの道とも異なる日本固有の道としている。この流れを汲む寛は、「神ながらの精神¹⁵」の要点として次のようにまとめている。

人間は如何にやむごとなき御方様でも、御老人でも、常に更に上にいます神様を仰ぎまつることを怠ってはなりませぬ。之と同時に如何に賤しき者、幼き者、未熟の者なりとも、皆皇神様の御末として、神様の付き添ひいまし、護り給ひつつあるものでございます。されば先づ是を覺り、此の本質を有るが故に有らしめ、「すめらみこと」をして彌々「すめらみこと」と成し奉り、其の御光を仰ぎ一人も漏なく相互に「みこと」と成し合うべき

でございます。「すめらみこと」とは、「最も善き、美しき、有り難き懐かしきみこと」の義でございます。¹⁵

神ながらのこころ

- 一 各も各もの上に、神のましますことを忘れざること。
- 一 常に、有り難くなつかしみ思う心を以つてものごとに對ふこと。
- 一 己が受持ちを通して、世の中を提げ追ひ進むこと
- 一 清明心を以つて、汚を祓ひ、其が中よりうるはしきこと（善美愛）を生ぜしむること。
- 一 道と事とを明らかにし、天皇をして彌々「すめらみこと」たらしめまつり、其の御光を仰ぎつつ相扶けて「みこと」となし合ふこと。¹⁶

このような筈の「神ながらの道」は、神典である『古事記』（和銅5年・712）、『日本紀（又日本書紀）』（養老4年・720）、『祝詞』（平安時代の『延喜式』927年に含まれている）に伝えられている道であり、それらを補うものとして『古語拾遺』（大同2年・807）があり、それらの神典の解釈を助ける参考書として『諸国風土記』（和銅6年・713）と『万葉集』（天平宝字3年・759以降成立）が挙げられ同時に神典¹⁷とされている。

このような筈の「神ながらの道」は、後述するように、特に建学の精神の基盤となっている感謝の心に大きな影響を及ぼしていると思われる。

「川村女学院」の建学の精神に大きく関わりのあるもう一人の人物は、夫君川村竹治（1871～1955）である。彼は、満鉄総裁、台湾総督、司法大臣といった要職に就いた人物であるが、若いころから教育に関わりを持ち、関心も持っていたようである。現に、彼は、既に15歳の時から2年余り郷里で小学校の代用教員を務め、さらに上京後の第一高等中学校時代には、学資を得るために「興文学舎」という私塾を開いて英語、数学、漢文を教授した¹⁸ということである。長じてからも大正13（1924）年には欧米の女子教育等視察旅行に出かけ、アメリカの大統領とも会見している。このような川村竹治が「川村女学院」の創立に参画し、開設とともに評議員となり、その教育に関心を示したのは当然の成り行きであったろう。

「川村女学院」創立当時の川村竹治の教育事業について、「これ川村君の肚の現われとして、世間にありふれたる片々たる育英事業乃至奨学機関などとは全然そのシステムを異にして、そのすべてが徹底的で現実的で、制度及び組織が巖然たるサイエンスの上につきあげられ、あくまで合理的な文化的な方法で教育能率を極度に發揮しようとして居る点、天下に女学校多しと雖もその比を見ない。けだし、世に教育家篤学家多しと雖も川村君の如き徹底味のある積極的教育政策を樹てた人物は日本においては、稀有の事実として本邦女子教育界に誇るべき快事である」¹⁹とされている。

そして、川村竹治は、このような学院の運営上の事柄だけでなく、教育の内容についても、上記の筧克彦と共に大きく関わっている。その具体的な事例の一つは、「やまとばたらき（日本体操・皇国運動）」を学院の授業へ導入したことである。つまり彼は、「川村君の主義すなはち皇国主義」と、かりに名づけて置く一さうした川村君平素の国家観から出発して、川村女学院に『皇国運動』すなはち『のりとを唱える体操式ダンス』を全院生徒にこころみ²⁰ 導入したのである。これは、筧克彦考案の体操で、学院では大正 15 年から昭和 17 年まで授業に取り入れられているが、それは、筧によると「古事記の精神を身体の挙動により体得し、日毎日毎に之をして深奥ならしむる意味深き運動とする。若し毎朝規則正しく行ふときは肇国^{ちようこく}の大精神即ち^{かんながら}惟神の光はいつとなく内部より輝くに至る」²¹ ののである。

川村竹治は、このような『皇国運動』なるものを特に採用し、物質文明爛熟時代の危機よりそれらの女性を救い出し、新たなる精神的偉力の所有者を育てあげ、将来への社会—新時代へのよき女性を送り出さんとする遠大のプランを着々実現²² して行ったのである。かくして「川村女学院」では、この「皇国運動」は、徳育をかねた体育として実行されたのである。もともと、これは若干改変されて「川村女学院」では「紫雲運動」と称されるようになった²³。

次に、「川村女学院」創立の思想的背景を論じるにあたって、当初から学院の評議員であった澤柳政太郎（1865～1927）の教育思想を取り上げておきたい。

周知のように、19 世紀末から 20 世紀初頭には各国の教育改革が盛んで、それを「新教育運動」と称しているが、その口火を切ったのは、シカゴ大学に付設され、明治 29（1896）年に開設されたデューイ・スクールの児童中心主義教育の実践である。これは、J. デューイ（J. Dewey 1859～1952）の「実験室学校」として知られているが、そこでは、「書物の学校」から「労作学校」へというスローガンの下に、知識の教授を中心に置くのではなく、社会的・生産的活動を教育課程の中心に位置付けている。そして、その学校でカリキュラム編成の基本原則とされたのは、子どもの興味の尊重である。この立場では、学校教育の画一性や知識の注入主義が否定され、子どもの個性、その自発活動や自活が尊重されている。

このような J. デューイの教育思想は、我が国のいわゆる大正デモクラシー運動の中でもっとも盛んに紹介された教育思想であった²⁴。そして、このいわば児童中心主義教育をいち早く我が国に取り入れた一人が、「日本のデューイ」²⁵ ともいわれる澤柳政太郎である。彼は成城小学校の創立者としてよく知られているが、当代随一の教育実践家であると共に教育思想家でもあった。

澤柳政太郎は、明治 21（1888）年に東京帝国大学を卒業後、すぐに文部官僚となる。そして、明治 25（1892）年に文部省をいったん退職して、尋常中学校の校長や旧制高等学校の校

長を歴任した後、明治 31 (1898) 年に、文部省に復帰し、普通学務局長として才腕を振るい、文部次官にまで上り詰めている。その間、彼は、義務教育を 6 年間に延長し且つ無償化した、大学・旧制高等学校・高等師範学校等を増設したり、教科書制度を確立したりするのに携わり、学校教育の近代化に努めている。その後、東北帝国大学初代総長、京都帝国大学総長を歴任した後、在野の教育者となる。そして、彼は、大正 6 (1917) 年、よく知られているように実験学校として私立成城小学校を創立した。また、晩年には、大正大学学長、成城学園理事長に就任している。

このように彼は、学校教育の監督官庁である文部省の高官を経験するとともに、教育現場の責任者として活躍する教育者でもあった。そして、わが国では珍しい教育官僚、教育現場の責任者の経験を併せ持つ教育思想家でもあった。

さらに、彼は西欧の近代教育思想を吸収しながら、幼少時から学んだ儒教思想に加えて、大学時代からは、仏教思想も深く探究している。そして、それらを背景として、多くの著書、翻訳、講演集を出しているが、その中でも彼の名著『実際の教育学』(1909 年) は、わが国の実証的教育研究の記念碑的著作とされている。

しかし、彼の教育者としての真価を発揮したのは、やはり実験校として成城小学校を創立し、校長としてその教育思想を実践したことであろう。このことが、大正時代の教育界に新しい息吹をもたらすことになる。

それでは、澤柳が目指した学校は、どのような学校であったろうか。成城小学校の創設趣意書には、次のような 4 つの教育方針が述べられている。1) 個性尊重の教育 附、能率の高い教育 2) 自然と親しむ教育 附、剛健不撓の意志の教育 3) 心情の教育 附、鑑賞の教育 4) 科学的研究を基とする教育である。これは当時としては極めて斬新な教育方針であり、近代教育思想を身に付けた澤柳にして初めて可能なことであった。

彼によると、真の教育は、人の本性、それぞれが持って生まれた特性や才能を啓発することにある。この教育理念を実行するために、児童を大人が考えた枠にはめ込むのではなく、また知識の詰め込み教育をするのでもなく、児童の自由な、拘束されない自発的活動を基本に、彼は、児童の自発的な自学、自習、自律を指導したのである。

そして、伸びる子は可能な限り伸ばし、遅れている子は、その子の歩みにあわせて伸ばすようにしている。そのために、まず 1 学級を 30 人に絞り、教授方法も教える内容の分量や程度も個々の児童に合わせて教育し、能率のいい教育を心がけている。また、大空の下、大地の上で出来るだけ多くの時間を割いて自然相手の教育を心がけ、児童の興味・関心や能動性を引き出そうとしている。そして、児童を愛好し、その気分、興味、欲望を理解し同情しうる教師を

求め、その教師と児童との心の触れ合いが、重視されている。このようにいわば児童中心主義の教育が実践されたのである。

このような澤柳の教育実践は、立身出世を目指し上級学校への過度の受験競争が起きていた当時の教育界では、画期的な出来事であった。また、大正デモクラシーを背景とした当時の教育界に新しい動きを示唆するものとなった²⁶。

この澤柳が「川村女学院」の建学の精神に、具体的にどのような影響を及ぼしたかについてはさらに詳細な検討を加えなければならないが、彼が同学院の評議員であったことは有意義なことであつたろう。

例えば、「川村女学院」発足当初の学生心得には「自学自習自為ノ習慣ヲ養ヒ心身ノ充実ト健康トヲ計ルコト」²⁷とあり、何よりも創立者は「知育偏重に傾き形式主義画一主義に陥りました教育の現状に顧みまして、生活に即した教育、実際と離れない教育でなければならぬ」²⁸と考え、また選択科目を設けて「本人の個性、家庭の状況等に応じて学習せしむる」²⁹こととし、「個性の尊重技能の修得ということも、その目的の一つ」³⁰と述べている。これらはまさに澤柳の教育方針と共通するところであり、少なくとも澤柳がそのさきがけとなった大正デモクラシーの「新教育運動」を背景としていることは明らかであろう。

「川村女学院」創立の思想的背景としてさらに取り上げたいのは、『論語』の思想である。漢学者で「川村女学院」の創立にも参画し、評議員にもなった芳賀剛太郎（1867～1947）は、学院創立以前から川村家で『論語』と漢字学を講じていたということであるが、「川村家の不肖に求むるに、論語の講義を持ってするもの、自ら修め、且つ所謂衆人と與に善を為すものにして、後年女学院の創立せらるる、蓋し益々其の意を擴充したるものならん乎」³¹と述べている。

周知のように、『論語』は、孔子（552?～479? B.C.）とその弟子たちの言行録であるが、儒教の基本思想を表すとともにその教育の実践記録でもある。

そして、孔子の教育上の中心は、やはり彼の思想の根本をなす「仁」と「礼」の道德教育である。道德教育といっても、『論語』に示されているように、それは、非現実的、形式的な堅苦しい道德や社会規範の教育ではなく、極めて現実的な人間の生き方・在り方の教育である。

まず、孔子の「仁」とは何であろうか。それは、もともと「人と相親しむ」意とされるように、人と人との間に相通じ合う親愛の情である。孔子自身は、「仁」そのものの定義をしていないようであるが、いろいろな状況のもとで、教育的な配慮をしながら、「仁」に関する弟子たちの質問に答えている。つまり、孔子は、「仁」を問うその人の力量や教養の程度、さらにその人の性格、また質問の内容などに応じて、最も相応しい解答をしているのである。

まず、彼は、武芸に優れていた弟子の樊遲^{はんち}の問いに対して、「仁」とは「人を愛すること」（『論語』顔淵第十二の22）と答えている。また、学問を好み、弟子の中で最も優れていた顔淵（顔回）の問いに対しては、「克己復礼」（同上の1）つまり、わが身を謹んで礼の規範に立ち戻るのが「仁」であるとしている（『論語』の現代語訳は原則として岩波文庫の金谷治氏の訳注による）。さらに、徳行に優れ、立派な政治家になれるとされた仲弓^{ちゆうきゆう}に対しては、「家の外で人に会うときには大切な客に会うかのようにし、人民を使うときには大切な祭りを行うかのようにし、自分の望まないことは人に仕向けられないようにし、国にいても怨まれることがなく、家にいても怨まれることがない」ことが、「仁」であると答えている。

そして、孔子は「仁とは、高遠なものではない。自分が仁でありたいと望めば、そこに仁はやってくる」（述而第七の29）とも言っている。このように孔子は、弟子たちの「仁」についての問いに対して、その弟子の置かれている状況や力量、さらにその性格、その立場、問い方などに応じて、教育的な配慮をしながら、いろいろな答え方をしている。

したがって、「仁」を一義的に規定することは困難であるが、要するに、それは、人間としての立派な生き方・在り方の精神的な原理なのである。そして、その「仁」のあり方は、自己にとっては「忠^{ちゆう}」つまり自分の真心に忠実であり、他者に対しては「恕^{じよ}」つまり真心を持って思いやることでなければならぬ。しかも、そのような「忠恕」は、現実の社会生活の中では「礼^{れい}」という形で表現される。したがって、精神的な「仁」は、「忠恕」として作用し、現実の具体的な社会生活の中では「礼」という形で現れるのである。

そこで、孔子の教育の目的は、弟子たちに、修養して「仁」を身に付けさせることとそれを社会規範として具体化する「礼」を習得させることであった。ただ、ここで注意すべきことは、孔子が「人として『仁』の心がなかったなら、礼があっても何の意味もない」（八佾第三の3）というように、根本にあるのは「仁」であり、「礼」はそれが社会規範として現れたものである。実際、人の立派な生き方・在り方、優れた徳行は、この「仁」によって支えられ、その命を吹き込まれているのである。

したがって、孔子の教育の究極的な目的は、「仁」の修得であり、単に「礼」を身に付けることではない。「仁」は、孔子の教育の目的そのものなのである。このような孔子の「仁」と後述する創立者の感謝の心は、そのニュアンスは異なるにしても教育上の位置付けは同様である。また、「川村女学院学生心得」の第3条「報本謝恩ノ念ヲ篤ウシテ忠孝ノ情ヲ養ヒ常ニ長上ヲ敬ヒ幼弱ヲ勞リ信義ヲ重シ慈愛ト親切トヲ以テ人ニ接スルコト」というのは、直接的にはいわゆる「教育勅語」に基づいているにしても、其の背景に儒教の教えがあることは明らかであろう。

そして、孔子の教育方法は、『論語』の随所に見られるように、弟子たちとの対話（問答）法である。ソクラテスの対話法はよく知られているが、ソクラテスより約80年早くこの世に生を受けた孔子が、弟子たちとの間で生き方について対話を繰り返し、注入的ではなく、開発的な方法でそれぞれの長所を引き出そうとしていることは、注目に値する。

実際、孔子は、上述したように、弟子たちの教養の程度、力量、立場、性格、具体的な質問の内容などを教育的に配慮して、それぞれの弟子に適切に対応している。これは、弟子たちの諸能力を発展させる、まさに今日の開発的教授法に当たるものである。そして、これは既述の創立者の教育方法とも相通ずるところである。

このように「川村女学院」の建学の精神には、孔子の思想を中心とした儒教の影響が認められる。当時の川村家では、家庭教育の中でも『論語』がよく用いられていたということである。このようにして感謝の心を基盤に「礼節」を重んじ、「孝は百行の本」³²と説く創立者が、儒教の有形無形の影響を受けたことは否定できないことであろう。

さらに建学の精神の背景にあるものとしてよく指摘されるのは、創立者が明治女学校で学んだことである。彼女は、同校でキリスト教の自由教育を受け、女性の自覚や社会人としての義務を果たしうる女性の育成を強く意識するようになったとされる。確かに同校は「女性の自覚と自立」を掲げ、当時の若い女性たちの心を引き付け、羽仁もと子、野上弥生子、相馬黒光等々も学んでいる。しかし、創立者が同校で学んだのは、父親宛の手紙によると、明治28年9月13日19歳の時から特別生（生徒とは言わない）として通い始め、「私（創立者）の修むる処の学科は、英学（読本・文章・会話等）、漢学・和学・文章等」であり、特にキリスト教について深く学ぶことを目指したという訳でもないようである。しかも、翌年の2月5日には同校の隣家より出火し、校舎・別舎・校長舎等が類焼して授業は中断され、落ち着いた勉学は出来なかったと思われる。しかし、創立者は、明治29年4月23日20歳の時に半年余学んで同校を卒業している。このようなわけで創立者が同校で学んだことが、女学院の建学の精神にどのような影響を及ぼしたか今手持ちの資料では明確に裏付けることは出来ない。

以上のような思想的な背景の中で、創立者の建学の精神に特に大きな影響を与えたのは、やはり寛克彦の随神の道と川村竹治の国家観であろうと思われる。創立者は、女子教育に携っていることを「神命に基づく命がけの事業」³³としながら、その動機について次のように述べている。

私は世界の現状が心がかりでなりません。日本の有様が心配でなりません。そのために私には現今の女子教育に対して、また女子教育を通しての男子教育に対して、やむにやまれぬものがございます。私は日本の女でございます。その私をしてやむにやまれぬ気持ちに

ならしめたものは、神様でございます。私のこのやむにやまれぬ気持は、私をして万難を排して本院を設立せしめたのであります。従って私が日本の女として、日本人のために、日本人を通して人類のために、女子教育改善の大きな仕事に従事して居ることは、私の神様からうけた唯一無二の貴い使命と確信して居るのでございます。³⁴

さらに、このような動機のもとに創立された「川村女学院」には、いわゆる創立者の「徹底した日本主義」が貫かれている。そのことに関して、創立者は次のように述べている。

現今の日本には新知識の獲得にあまりに忙しいために、折角私共の祖先が何千年の貴い時日を費やして造りあげたよいものを忘れて居る。否否時には踏みにじって一向かまわぬ處の所謂新しいと自ら信じて居る気の毒な人々があまりにも多過ぎます。これ等の人達をして其の研究し信奉している世界主義、人類主義、社会主義等を、一様にまごころ³⁵の車にのせて、一刻も早く徹底せしめて、日本人本来の立場に帰せなければなりません。巖として存在する日本の国家、日本の民族を忘れて何の人類主義がありませうぞ。かくの如く観じて、私は神ながらの道、差別即平等の妙鏡を忘れて、平等相の一端にのみ陥った幾多の人々をして、徹底したる日本主義に帰らせることを私の任務と感じます。而して私は私のこの任務を将来の母たる私の教え子を通してはたすつもりでございます。³⁶

このようにして創立者は、「神ながらの道」に基づく「徹底した日本主義」を「川村女学院」の「将来の母たる教え子」を通して普及することを使命と考えていたのである。

もっとも、外来文化や思想を排斥し、国家の対外膨張を主張する当時の右翼集団や軍部の立場に対して、創立者は、形式的国粹主義者であり、「神ながらの道」を忘れて、ひたすら「ことあげ」³⁷と差別相とにとらわれているとして批判し、自分の立場とはっきり区別している³⁸。創立者の「徹底した日本主義」は、そのような立場とは異なり、「徒に新しきに走らず、徒に古きを棄てず、祖先伝来のまごころを最も大切な導者として進んで行こう」³⁹というのである。このような考えによって、先に述べた仏教系やキリスト教系の学校とは異なる日本古来の伝統、神道精神に基づいた「川村女学院」が創設されたのである。

3. 「感謝の歌」について

上述のように、建学の精神の基盤にあるのは、感謝の心であるが、創立者によると、「感謝の歌」は、その感謝の心を現わしたものである⁴⁰。

かしこしやこの世守りてとこしへに

みいつも愛もかぎりあらじな⁴¹

この歌には、「宇宙には神がましまし、真理があり、神の摂理として、真理は必ず追究され、実現されてゆくものであるという自覚」⁴²が表現されている。

創立者によると、「かしこしや」とは、神の存在を認め、神を賛美した言葉であるが、同時に、神と真理の存在を自覚した喜びを言い表している。「この世守りて」とは、神の作用について述べたもので、神のましますこの宇宙は、神の守護から離れることは絶対にないという確信と神への信頼を表したものである。「とこしへに」とは、時間的な永遠を意味するが、厳密には、時間や空間を超えた悠久性を現わしている。「みいつもあいも」は、神の作用を現わしている。「みいつ」は、神が神の意思を、万物を通し、万物に対して、実現して行く点を主として現わし、具体的には自然界に起こる暴風、地震また人間界に起こる人々の疾病、宗教上の戒律、道徳律などがそれにあたる。「あい」は、愛育、親愛など主として温かくはぐくみ育てる点を現わしている。神の作用は、無限絶対のものであるが、人間にとっては「みいつ」と感ぜられる場合と「あい」と感ぜられる場合があるとされるのである。「かぎりあらじな」というのは、神の存在とその作用即ち神意神徳が、絶対のものであることを感嘆した言葉で、神が存在し、宇宙は神が創り且つ守るのであるから、いかなることも神の摂理の外のことではなく、必ず救いの道はあるという深い信念を現わし、神に対して感謝している言葉である⁴³。

この歌は、創立者が朝日を拝みながら自然に自ずから口ずさみ生まれた歌であり曲であるが、その時拝んだのは、天文学上の太陽ではなく、太陽が表現する宇宙の神秘的、根源的力である。それは、神道の教えによると、天照大御神⁴⁴であり、天照大御神の神徳を太陽の中に認め、それを拝んだというのである。

ここにこの歌が、古神道つまり随神の道を背景としていることを読み取ることができる。上述した「神ながらのこころ」では、「各も各もの上に、神のましますことを忘れざること」(前出)、「常に、有り難くなつかしみ思ふ心を以つてものごとに対ふこと」(前出)とされているが、これはまさに神の存在を認め、常に感謝の念をもつという「感謝の歌」の主要な内容を成しているのである。創立者自身も、感謝の歌は神が存在するという信仰を神道の形をとって現わしている旨述べている⁴⁵。

この「感謝の歌」は、創立者にとっても重要な意味を持つ歌であるが、昭和2年の春ごろから今日まで、学園の教職員・生徒一同が、朝礼、儀式、会合などに学園精神を表徴する歌として斉唱している。それは、「感謝の心を養い奉仕の心掛を忘れざらしめますよう」⁴⁶に行われているのである。そして、創立者は、「今後この歌の精神を、あらゆる方面から研究して、あくまでもその精神を活かしてゆくことを希望してやまない」⁴⁷と述べている。

4. 感謝の心と「ひとり」の境地

建学の精神の基盤にある「感謝」の真意を理解するために、創立者が、晩年になって最終的に到達した「ひとり」の境地を取り上げてみたい。これは、「神と道と真理との存在を信じる境地」⁴⁸であり、その境地に達することによって真の感謝の念が湧き出てくる。創立者によると、この「ひとり」の境地は、最も奥深い心境であり、いつも心の奥底にある。そして、これは、「私の日常生活のあらゆる行動の根底であり、また活動力の源泉」⁴⁹とされている。

また、この「ひとり」の境地は、創立者の生活経験と思索の中からいつしか生まれ出たということであるが、単に理論の世界にあるものではなく、「理論を生み、理論を調整する力をもって居りますが、理論で説明し尽くせる心境ではない」⁵⁰のである。これは、いわば創立者の宗教的、形而上学的境地といえることができるであろう。そして、この境地は、理論的、体系的にまとめて説明することはできないので、いろいろな観点からその姿や状態が説明されている。

創立者によると、この境地は、1) さびしいとか歓喜の境地ではなく、豊かな満ち足りた広々とした境地、2) 静と動を超越した状態、3) 思慮分別を絶し且つ制止することのない境地、4) 安らかな気分で心身の最もよく調整されている状態、5) 他から何ものをも求めない無欲の状態、6) 現在もっているものが、すべて無上の価値あるものとして最大の貴さを発揮する状態、7) 自分が真に求めるべきものは何か最も明瞭になる状態、8) 「無為」の境地ではあるが、何を為すべきかを的確に指示する力を持っている境地である⁵¹。

これらは、創立者が「ひとり」の境地の姿や状態を説明したものである。この境地に立つことによって、1) 自己も他人も万物が尊いと感ぜられ、真の「人格の尊厳」がわかる。2) 「神」が存在するという信仰が含まれ、神への絶対帰依、神にまかせきった状態になる。3) 自然界の神秘的な法則への信とともに人間性に対する信があり、人間の欠点、弱点を深く洞察しながら、あくまでも人間を愛する心を含む、真の愛の基盤となる意識を得る。4) 宇宙の真理の存在を確信し、その真理を探究し随順しようとする研究心・求道心の源泉を見出す。5) 宇宙の「窮極善」の存在を確信し、人間界の醜悪、闘争、自然界の不可解な矛盾などの奥に「道」があり、実現されるべき「善」があることを信ずる。6) 宇宙の美の実現への生成発展を確信し、神が創造した庭の一木一草にも無限の美を感じその成長を賛美し、その発達助成に参加することの喜びを体験する。ここでは自己と一木一草とが一つになり感謝と法悦の念が生じる。7) 精神の知情意の作用が、最もよく調和している状態で、知の研究にも、情の芸術的活動にも、意の行動にも、正しく的確に移り得る状態になる。8) 一番根本的な意識で、「生命」に直結した、いわば天地の創造力と帰一した心境になる。この境地は、「我であって我に非ざる境

地」⁵²とされ、真善美を生み出す根源力と修得した知識や技術を最もよく生かす力がでる。9) 「文化」を創造する精神であると同時に人類の生活に秩序と規律を与える「統制力」の根源を持てる。10) 人は、この境地に達してはじめて完全な人になり、真の意味の自主性を持った独立自尊の人格者になる。単なる技術教育ではない人間教育は、この境地を導くことを忘れてはならない。「女性の自覚」の目的は、「女性をして女性の立場から、この境地を発見せしめること」⁵³にある。11) 画家が、絵を描く場合の創作心もこの境地の現れであることがわかる。画家が、その対象を神人、神物としてながめ、その神の「ひかり」を現わしたときに至上の美を現わす神品となるのである。創立者が、開設以来、芸術教育に重きをおいてきたのは、芸術を学ぶことによって「女性の自覚」の道を実践的に歩ましめ、芸術の道を正すためである。12) 「ひとり」の境地からみた幸福は、「絶対感謝の生活」⁵⁴にあり、無限大の光明、絶対の光に照らされている。そのために、相対的な人間生活の種々の事相は、そのまま無限の光をはなれてきて、感謝と絶対の幸福感が湧いてくる。このような幸福は、誰でも求めれば必ず与えられる絶対安住の境地である。13) 「ひとり」の境地の恋愛は、至純な恋愛である。この境地の愛は、聖愛、絶対愛、慈愛、仁に通じるが、それが異性間の愛として発現する場合には、恋愛となるのである⁵⁵。

以上が、創立者のいう「ひとり」の境地の概要である。ここに挙げた人格の尊厳、神への絶対帰依、人間愛を含む真の愛、宇宙の真理の探究と求道、究極善の確信、知情意の作用の調和等々13項目のうち、今日においても重要でないものは一つもない。

これは、単なる知識や技術ではなく、したがって理論的、体系的に説明できるものではないが、創立者の日常生活のあらゆる行動の基盤にあり、活動力の源泉となっている。そして、このような「ひとり」の境地に立って、はじめて真の感謝の念が湧いてくる。上述のように、「女性の自覚」の目的もこの境地を発見させることにある。

川村学園の建学の精神は、それを真に理解するには、このような「ひとり」の境地にまで遡って捉えられなければならない。実際、創立者が目指したのは、単なる形式的・画一的な技術教育ではなく、人間教育であり、端的に言えば、それぞれの「ひとり」の境地を体得させることである。それは、具体的には、真の感謝の心と女性の自覚を体得させることなのである。

5. 感謝の心と女性の自覚・社会への奉仕について

感謝の心をより深く理解するために、上に述べた「ひとり」の境地に立って、「感謝」を吟味すると、まず、感謝の念には次のような階層が見られる。

- 1) 「神」のましますことを知り得たことに対する深い感謝の念
- 2) 「神」につかえるものとしての自己の存在に対する感謝の念
- 3) 自己をこのように存在させるところの祖先と父母とに対する深い感謝の念
- 4) 父母と社会、自己と社会との繋がりに思い至って生じる国家社会に対する感謝の念
- 5) 自己も他人もそしてその他のあらゆる存在物がともども神の道を実現しつつある使徒であると信じると万物に対する愛の心が生まれる。そして、この愛の心は、感謝の念に他ならない⁵⁶。

このような感謝の念の階層は、「ひとり」の境地に立って初めて明白に理解され実感されるようになるが、この感謝の念の内容は、「愛」を感じて、「愛」を持って応える心ということである。創立者は、「まことの感謝は『愛』に対して『愛』を以ってこたえるところ」⁵⁷としている。したがって、「愛」と「感謝」とは表裏一体の心の作用とされるのである。

このようにして、「感謝」は、人の世を人の世らしくし、人と物とを正しく結びつける。そして、この感謝の心によって、他人を神の子として認め、他人の人格を尊重し、万物を生命あるものとして認め、物を天物として認めることが出来るようになる。このように自他を神の子としてその人格を尊重し、万物を天物と認めるところに感謝の本質があるとされる。

次に、もう一つの柱である「女性の自覚」とは何を意味するのであろうか。創立者は、上述のように関東大震災を目の前にして自覚ある女性の育成を目指したのであるが、人類文化の発展という観点からも「男性は男性としての、女性は女性としての深い自覚と責任を持つことは、いつの世に於いても、文化発達の為に極めて重要」⁵⁸としている。さらに、「現代の女性は女性としての自覚を、見直し、聞きなほして其の自覚を徹底せしめ、それによって人類の文化を一転回せしめる機運を作る重大な責任がある…中略…これを具体的に、文化の諸方面に就いて申しますならば、人類平和の問題、世界経済の問題、思想の問題其の他に、滞りない女性のまごころを反映させる」⁵⁹ことが重要である。そして、そうすることのみが、現代の実際問題に対する「手近にして確実な解決方法」⁶⁰とされるのである。

実際、女性が女性の本質を自覚し、永遠の女性の姿を見出し、それによって、現代の実際問題に対して遂行すべきその使命を発見して、その実現に向かって突き進んで行けば、それは単に女性の満足というだけにとどまらず、人類のためにこの上もなく喜ばしいことなのである。現代の女性は、ぜひともこの点を深く反省して、その責任の重大さを自覚し、このように重大な責任を背負わされたことを幸福と感じなければならないというのである。

このような自覚ある女性の育成のために、「川村女学院」を創立し女子教育をはじめたのであるが、その目的について創立者は、「この学校は知識を教えることのみを目的とせず、知識

も技芸も、すべて人間を造ることの方便として居ります。如何なる境遇に面しても自分の人間としての本分を生かしてゆくことが出来、社会の一員として女らしく立派に人間の義務を果たしうる婦人を造ることを目的としております。」⁶¹と述べている。

そして、このような「女性の自覚」の真の目的は、上述したように、女性をして女性の立場から、「ひとり」の境地を発見させることであり、真の感謝の念を湧き出させることなのである。

ただ、「この心境の体得は、自覚せしめるより他に方法がない」⁶²ので、その際の教育の方法として、生徒と出来るだけ直接に触れて個別に指導する個別的方法と行事等を通じて指導する集団的方法がとられている。その行事等には、清掃、質素の風の奨励、作法、講演会の開催、生徒の誕生祝い、ひな祭り、敬老会等々の体験的学習が含まれている。創立者が、実技教育、芸術教育、茶道、華道などを奨励したのも、教え子に「ひとり」の境地を開かせるためであり、たとえその境地へ達することが出来なくてもそこへ達し得る「芽生え」だけでも身につけてもらうためである。このようにして自覚ある女性を育成し、「ひとり」の境地を体得することによって真の感謝を見出させることが創立者の目指すところであったのである。

川村学園女子大学の建学の精神には、さらに「社会への奉仕」が加えられているが、これは、「川村女学院」創立当初から、社会奉仕を重視し、災害への義援や不遇者への支援が行われ、今日まで伝統として受け継がれている。実際、「川村女学院」では「創立当初より社会奉仕の念を生徒に教えると共に、学院としては力の及ぶ限りの社会奉仕につとめて来た」⁶³のである。

創立者によると、人の心遣いの中には「自己の立場を守り、自己の成長繁栄をはかる面」（自利・個人主義）と「自己の立場を忘れて、主として他人の為をはかる面」（他利・博愛主義）とがあるが、この二つの面は、いずれも貴い心遣いでありいずれを欠いても人の生活はその貴さを失ってしまう。そして、人間らしい人、正しい人の心遣いには、この両者が、矛盾対立するのではなく、総合統一されている⁶⁴。そして、他人の為に奉仕しようという心は人に励みを与え、そして奉仕の心がある人の生活は、勤勉で且つ喜びに満ちている。「このような生活こそ、まことの充実した生活ということが出来るのでございます。世と我と、自己と他人と、一に帰した生活でございますから、ほんとうに明るく朗らかになり得るのであります」⁶⁵と述べられている。結局のところ、この社会への奉仕も、感謝の心、愛の心の実践とみなすことが出来よう。

このような建学の精神は、今日の社会において、どのような意義を持つのであろうか。

21世紀の社会は、人類がかつて経験したことのない高度文明社会で、「知識基盤社会」といわれる。そこでは、新しい知識・情報・技術が、社会のあらゆる領域で人々の活動の基盤とし

て飛躍的に重要になる。したがって、今日の我が国の学校教育では、単に知識や技能を教え込むのではなく、このような社会で必要とされる能力つまり「生きる力」(①確かな学力, ②豊かな人間性, ③健康・体力など)の育成が行われている。これは、いわゆる「21世紀型の市民」を育成するという点で大切なことであろう。しかし、平和で真に心豊かな社会を目指すとするれば、創立者の言われる建学の精神即ち感謝の心, 女性の自覚(男性の自覚を含意), 社会への奉仕が益々重要になってくるのではないだろうか。実際, 21世紀の「知識基盤社会」においては, 人間の根本的な生き方・在り方を導く建学の精神が, 一段とその重要性を増し意義深いものになっていくだろう。したがって, 特に私学においては, それぞれの建学の精神に基づいた新たな教育課程が構築され, 今日の社会に対応した教育がなされなければならない。

注 記

- 1 川村女学院鶴友会雑誌部編 『川村女学院十年史』 昭和9年 2頁
- 2 同上
- 3 同上
- 4 同上
- 5 学校法人川村学園編発行 『川村学園70年のあゆみ』平成8年 28頁
- 6 秋田県鹿角市出身の音楽家で特に民族音楽の研究者として著名であるが, 童謡集を著したり, 音楽の教科書を作成したり, 外国の童謡を我が国に紹介したりしながら「川村女学院」でも音楽の指導をした。また, 創立者作詞作曲の「いつもゆたかに」の採譜をした。
- 7 川村文子先生記念事業委員会編 『紫雲—川村文子先生追悼記念録』 昭和36年 354頁
- 8 新山虎二著 『肚の人川村竹治』万里閣書房 昭和4年 243頁
- 9 竹田稔和 『『ドグマティズム』と『私見なし』—寛克彦の古神道について—』岡山大学大学院文化科学研究科紀要 第11号 所収 2001年(平成8年)
- 10 寛は, 6年間のドイツ留学中に, ハルナック(1851~1930)の下で神学, キリスト教史を学び, デイルタイ(1833~1911), パウルゼン(1846~1908)の下で哲学を学んでいる。そして, デイルタイからの影響が大きかったということである。
- 11 竹田稔和 「寛克彦の国家論—構造と特質—」岡山大学大学院文化科学研究科紀要 第10号 所収 2000年(平成7年)
- 12 寛克彦著 『古神道大義』3頁 大正元年 清水書店
- 13 『『かむながら』』といふ言葉は古典において『惟神』と『随神』と両様に記されているが, 前者は神それ自身の意であり, 後者は神の意を奉じての意である」(磯部忠正著 『神話哲学』119頁 昭和18年 朝倉書店)。なお, 本論では原則として「随神」と表記するが, それぞれの著者が「神ながら」としている場合には, それの関連する箇所ではそのような表記にしている。
- 14 広辞苑 第6版
- 15 寛克彦述 『神ながらの道』内務省神社局 大正15年 16頁
- 16 同上書 17頁

川村学園の建学の精神と教育思想

- 17 同上書 1頁
- 18 新山虎二著『肚の人川村竹治』 万里閣書房 昭和4年 161頁
- 19 同上書 246頁
- 20 同上書 242頁
- 21 寛克彦編『日本体操』 春陽堂 昭和4年 1頁
- 22 新山虎二著『肚の人川村竹治』 万里閣書房 昭和4年 245～246頁
- 23 川村女学院鶴友会雑誌部編『川村女学院十年史』 昭和9年 312頁
- 24 尾形裕康著『日本教育通史研究』 早稲田大学出版部 昭和56年 272頁
- 25 中野光、志村鏡一郎編『教育思想史』 有斐閣 1993年 141頁
- 26 中野光 「教育における統制と自由」(『教育学全集 増補版3 近代教育史』所収) 小学館 1980年 127頁
- 27 川村女学院学生心得 第2条
- 28 川村文子著『紫雲録 第2巻』一本書に所収の「我国女子教育の現況について」(昭和6年) 川村学園, 昭和28年 119頁
- 29 同上
- 30 同上書 120頁
- 31 川村女学院鶴友会雑誌部編『川村女学院十年史』 昭和9年 467頁。なお、同氏は、女学院創立当初、教職員一同に漢文を講義したり、生徒に講演したりしている。
- 32 川村文子著『紫雲録 第2巻』 川村学園興文会 昭和28年 151頁
- 33 川村女学院鶴友会雑誌部編『川村女学院十年史』 昭和9年 185頁
- 34 同上書 186頁
- 35 創立者は、「感謝の心」が本居宣長の「もののあわれ」を感じる心と共通である旨を述べている(『感謝と家庭生活』14頁)が、この「まごころ」も後者の「真心」と相通じるものであろう。後者によると「そもそも道は、もと学問をして知ることにはあらず。生まれながらの真心なるぞ、道には有りける。真心とは、よくもあしくも、うまれつきたるままの心をいふ。」(『玉勝間』一の巻)のである。そして、この真心を持って自然の感情のままに生きる人の道は、神代から伝わった神の御心のままの道つまり随神の道に通じるのである。創立者自身も『紫雲録 第1巻』(35～36頁)で「まごころ」は人間にとって最も大切で、道德の基礎・根本であり、利害や便宜を超越した「神ながらの心」と述べている。
- 36 川村女学院鶴友会雑誌部編『川村女学院十年史』 昭和9年 186頁
- 37 『万葉集』には、「葦原の瑞穂の国は神ながら言挙げせぬ国～」(3253)とあるように我国は神意のままに言葉であれこれ言い立てたりしない国とされている。
- 38 川村女学院鶴友会雑誌部編『川村女学院十年史』 昭和9年 186頁
- 39 同上
- 40 川村文子著『感謝と家庭生活』 川村学園興文会 昭和32年 1頁
- 41 川村文子著『感謝と家庭生活』には、昭和2年の或る朝、日の出を拝んで歌ったとあるが、『川村学園70年のあゆみ』にあるように、大正15年の『鶴友会誌』2号に初出とすれば、大正14年頃に詠まれたとするのが妥当であろう。
- 42 川村文子著『感謝と家庭生活』 川村学園興文会 昭和32年 1頁
- 43 同上書 1～3頁

- 44 「天にあって照り給う大神の意で、自然神としては日の神、人格神としては女性の皇祖神。』『古事記』では、イザナギノミコトが黄泉の国の穢れを見た左の目を洗ったときに生まれた神とされる。『日本書紀』では、イザナギノミコト・イザナミノミコト（日本の国土と神々を生んだ男女2神）が「天下の主者」として生んだ女神とされる。高天原の中心的神で太陽を神格化した皇室の祖先とされる神。天皇は天照大御神の子孫で現人神あらひとがみといわれた。
- 45 川村文子著『感謝と家庭生活』 川村学園興文会 昭和32年 21頁
- 46 川村文子著『紫雲録 第二巻』 川村学園興文会 昭和28年 118頁
- 47 川村文子著『感謝と家庭生活』 川村学園興文会 昭和32年 5頁。なお、創立者は、晩年になると、「私の宗教は『感謝宗』」であり、神道、仏教、キリスト教などの既成宗教とはまったく別のものであるとしている。
- 48 同上書 6頁
- 49 同上書 19頁
- 50 同上
- 51 同上書 20頁
- 52 同上書 25頁
- 53 同上書 28頁
- 54 同上書 34頁
- 55 同上書 19～36頁
- 56 同上書 6頁
- 57 同上書 7頁
- 58 川村文子著『紫雲録 第二巻』 川村学園興文会 昭和28年 4頁。なお、これは創立者の昭和8年の文章であるが、上述の澤柳政太郎は、川村女学院の教職員、生徒、父兄等を対象に昭和2年に行った講演「女子の理想」のなかで、男女は両方あってはじめて人類は完全に妙味が在り、それを基礎として人類の立派さが生まれてくるとしている。
- 59 同上書 5頁
- 60 同上
- 61 川村文子著『紫雲録 第一巻』 川村学園興文会 昭和27年 79頁
- 62 川村文子著『感謝と家庭生活』 川村学園興文会 昭和32年 28頁
- 63 川村女学院鶴友会雑誌部編『川村女学院十年史』 昭和9年 351頁
- 64 川村文子著『紫雲録 第一巻』 川村学園興文会 昭和27年 56～57頁
- 65 同上書 60頁